

環境史からみた信長の時代Ⅱ

—小氷期と豊年祭り—

高橋 学

I 視点

1467（応仁元）年から始まる応仁の乱以降、戦乱の時代に突入することはよく知られている。その原因として、有力守護の合議制に基礎を置く室町幕府の弱体化や、跡目相続問題による対立が原因とされている。また、都の戦乱が地方に伝播し、守護代、地頭、国人が勢力を増したことで説明されることが多かった。

これまで、歴史学の研究においては、マルクス史観に基づく階級闘争こそ歴史を変化させるものであり、環境変化が歴史に大きな影響を与えたという観点は、歴史時代については、ほとんどなかったと言ってよい。

しかし、筆者の日本史研究会古代史部会および大会における「古代末以降における地形環境の変貌と土地開発」¹⁾（1994）以降、中世史を中心に環境史学と称する環境が少しずつではあるがみられるようになった。そして、21世紀に入ると、環境史学を名乗る研究が急増する。しかし、それらの一部は磯貝富士夫（2001）「中世の農業と気候－水田二毛作の展開－」²⁾にみられるように、Fairbridgeが描いた世界の海水準変動曲線を、無理やり歴史時代の気候変化にあてはめるような強引なものであった。海水準変動を詳しくみれば、神戸の垂水や明石で標高4mに達している約7400年前の縄文海進最盛期ですら、赤穂市の千種川流域ではほぼ標高0mまでしか達しておらず、それより西に位置する岡山市シンフォニーホールの発掘調査においては、標高-65cmに最高海水準が位置していた証拠が残されている。すなわち、瀬戸内海という狭い範囲ですら六甲変動と呼ばれる地殻変動の影響を受けており、それを気候変動と読みかえるには無理がある。この点では、地理学者の井関弘太郎（1983）³⁾や小野忠熙（1980）⁴⁾の誤用がそのまま受け継がれていたといえる。

2001年以降、環境を考慮した歴史研究は、橋本政良（2002、2005）⁵⁾、飯沼健司（2004）⁶⁾、井上勲編（2004）⁷⁾、水野章二（2009）⁸⁾、水島司編（2010）⁹⁾と増え続けている。それらに大きな影響を与えたのは、北川浩之（1995）¹⁰⁾の屋久杉の年輪の¹³C/¹²Cを用いた過去2000年の研究であった。また、この成果は阪口豊（1993）¹¹⁾の尾瀬沼の花粉分析による成果と基本的に整合的であり、西日本地域では、北川の研究成果が利用できることを示している。「小氷期」と呼ばれる地球規模の寒冷化が15世紀中葉以降に本格化することが明らかになってきた。

この小氷期は、太陽活動から大きく3回（ウォルフ極小期、シュペラー極小期、マウンダー極小期）に分けられるが、最初の小氷期の始まりといわれる戦国時代の始まりはほぼ一致すると考えられる（桜井邦明1987）¹²⁾。農業を中心とする第一次産業が主であったこの時代、気候の寒冷化は人々に深刻な影響を及ぼした。冷夏はコメや野菜の生産に、厳冬はムギの二毛作に影響を与えた。特に、都市や気温の比較的温暖な地域へは、食うにこと欠いた人々が流入し、このような地域においても食料（食糧）が不足し、コメの値段などが高沸するほか、治安が悪化したことが考えられる。応仁の乱で京に

多くの兵が長期間駐屯すれば、それだけで飢饉が発生する。11年にわたる応仁の乱は、仮に戦乱にならなくとも、兵が駐屯しているだけで、京の都市生活を圧迫したと考えられるのである。このことは、幕末において、会津、薩摩、長州などの兵が京に結集した時にも同様の現象がみられた。

雪が多く冬作物が期待できない越後や、雪は降らないものの極めて厳しい寒さの甲斐では、在地領主が温暖な関東や駿河、遠江、三河、尾張などへの進出をうかがった。また食うに困った流民の移動がみられた。このような中で、甲斐の武田氏、駿河の今川氏、越後の上杉氏、関東の北条氏の動きがあったと理解されるべきであろう。そのような観点に立った場合、越後の上杉と甲斐の武田の川中島の戦いは、双方いずれにとって利点が少ない不毛な戦いであったと言わざるを得ない。また、黒衣の軍師たいげんすうふせっさい太原崇孚雪斎（1496-1555）の死後、今川義元は、川中島の戦いの仲裁などに無駄な時間を費やしている。1560（永禄3）年の桶狭間の戦いまでの5年間の行動は理にかなっていない（高橋 学 2016）¹³⁾。この時期、尾張は織田信秀が死亡して信長が家督相続したものの、一族による血みどろの主導権争いが続いていた。これにうまく乗ることができなかったのは義元の不明と言わざるを得ない。義元は雪斎という極めて有能な軍師を失い、それによって信長に敗れたと言っても良い。

Ⅱ 史料の限界

信長の史料として太田牛一（1527-1613）が現した『信長公記』¹⁴⁾は第一級史料と言われている。たしかに太田は信長、秀吉に仕え、実際に合戦に参加した同時代人である。しかし、晩年は秀吉の盟友であり五大老の一人であった前田利家に召し抱えられていた。そして、1605年頃に『信長公記』を書きあげたと言われている。したがって、スポンサーの主君である信長や、盟友の秀吉を悪く記述することはできなかったと考えられる。

また、桶狭間の戦いなどにおいて、明らかに兵数において劣勢の信長軍に参戦していたため敵の今川軍勢を過大に表現することもあった。太田によれば今川軍はおよそ4万人と記されているが、近年では2.5万人程度であったとされることが多い。現在でも、デモの参加人数などは、主催者発表と警察発表との間で、大きな数の違いはあるのが普通であり、正確に数えることができない状況においては仕方がないことと思われる。また、数万人単位の兵力を動かすためには、それを維持する兵站へいたんの数も多かったであろうし、兵農分離が明確でなかった段階では、どこまでが軍勢か知ること容易ではなかったであろうと考えられる。さらに、書状などの文献が残っている場合においても、足利義昭が発給したもののように、実態をとまなわなないこともしばしばであった。その上、敵を攪乱するうえで作成された書状も多く存在していた。どの時代に限らず、実際の戦闘にいたるまでの間に調略や裏切りを即すことは当たり前であったことを念頭に置いておかねばならない。出自の明確でない後の秀吉についてはもちろんのこと、信長の生まれた年や場所、信長の父信秀の没年、信長の子供を産んだ生駒女（類、久昌庵。便宜上、以下、吉乃きつ乃と呼ぶ）、信長の正室である斎藤道三の娘帰蝶（濃姫）、若い時代の斎藤道三のことなど様々な異説が存在し、正確には判明していないことが多い。

まして、のちの時代に作成された小瀬甫庵『信長記』（1622）¹⁵⁾になると、時流を観ながら著者にとって都合の良い脚色を加えられているのが普通と考えられている。

『武功夜話』¹⁶⁾は、1959年の伊勢湾台風時に愛知県江南市の吉田家の土蔵が崩れ発見されたとき

れる文書であり、吉田家の祖先である前野家家伝である。原本はほとんど公開されておらず、写本や1987年に吉田蒼生雄によって刊行されたものが出回っている。この『武功夜話』に関しては数多くの歴史家、自称歴史研究者の間で、偽書、疑文書とする意見やそうでないとする意見が存在する。特に、墨俣一夜城の記述や新地名などの使用をめぐることは、実に様々な意見が交錯している。とはいえ、他の文書には観られない若き日の信長や秀吉の行動が記されており、その点で興味深い。また、実際に江南市には、前野一族が居住していた広大な面積の生駒屋敷の跡地や絵図があり、実際に信長の子供を3人産んだ吉乃も存在しており、付近にはその墓が残存している。先に挙げた第一級史料の『信長公記』ですらバイアスががかかっていることは間違いなく、古文書に記述されていることが歴史的事実かどうか判断するのは容易ではない。近年の高校日本史に掲載されている聖徳太子像、足利尊氏像、源頼朝像、さらにはわずか百五十年ほど前の西郷隆盛像すら本当ではないとの考えが潮流となってきている。史料批判の困難さを感じざるを得ない。本稿では、様々な異説があることを前提にしながらも、差し障りがない範囲で通説に従っておくこととする。

Ⅲ 小氷期と大規模自然堤防の形成

さて、近年、マスコミ報道で「史上最高に暑かった夏」などという表現がしばしば観られる。多くの視聴者や読者は、それを何気なく納得して見過ごしている。しかし、温度計の発明は16世紀末のガリレオ・ガリレイ以降であり、しかも、それにはメモリがなく温度の上下変動しか判らなかった。現在のように、ケルビン目盛りのついた温度計は1848年物理学者トムソンによって発明された。したがって、体系立てて気温の計測が行われるようになったのは19世紀半ば以降のことである。マスコミのいう観測史上というのは、完新世や歴史時代全体を指すのではなく、19世紀半ば以降というのが正確である。日本でいえば、おおよそ幕末か明治維新以降ということになる。図1によれば、戦国時代から江戸時代末は「小氷期」であり、それが観測時代になって、気温が回復していくのが近代以降である。高橋 学 (2016)¹⁷⁾ に述べたように、端的に言えば中世温暖期が終わりを迎え、それまでに増えた人口に対して、小氷期に向かう時代に食糧（食料）が不足したと言える。このことは、氷河期が終わり温暖なアレレード期に増えた人口を、約11000～10000年BPのヤンガードリアス（ドライアス）期と呼ばれる寒の戻りに養うために農業が開始したというプロセスに似ている。小氷期の始まりには寒冷な地域で農業生産が破綻し、流民化した人々が、比較的温暖な地域や都市へと向いそこでも食糧不足が生じた。当時の領国支配システムでは食糧に余裕のある地域から、足りない地域への移送ということは考えられず、人が移動するか、それとも領国を広げるか、他の領国から奪い取ることになる。そうして、隣接した地域において領域争いが生じた。これが環境史からみた戦国時代である。

また、15世紀というのは、花粉分析によれば急速に里山を中心に禿山が増え、二葉マツ亜族（アカマツ）やツツジに代表される二次林が急速に拡大した時代でもある（外山秀一 2008）¹⁸⁾。この花粉組成の変化は人間の植生破壊が原因と考えられる。日々の生活に用いる燃料、鉄穴流しによる砂鉄採集、タタラ製鉄、製塩、窯業に必要な薪炭が大量に必要とされた。さらに、鉄穴流しの行われた地域などの下流では、濁水問題が生じ河川の氾濫で大規模自然堤防の形成が進行した。また、河床を急速に上昇させた河川の最下流では海の埋積が進行し、気候の寒冷化によってわずかに低下した

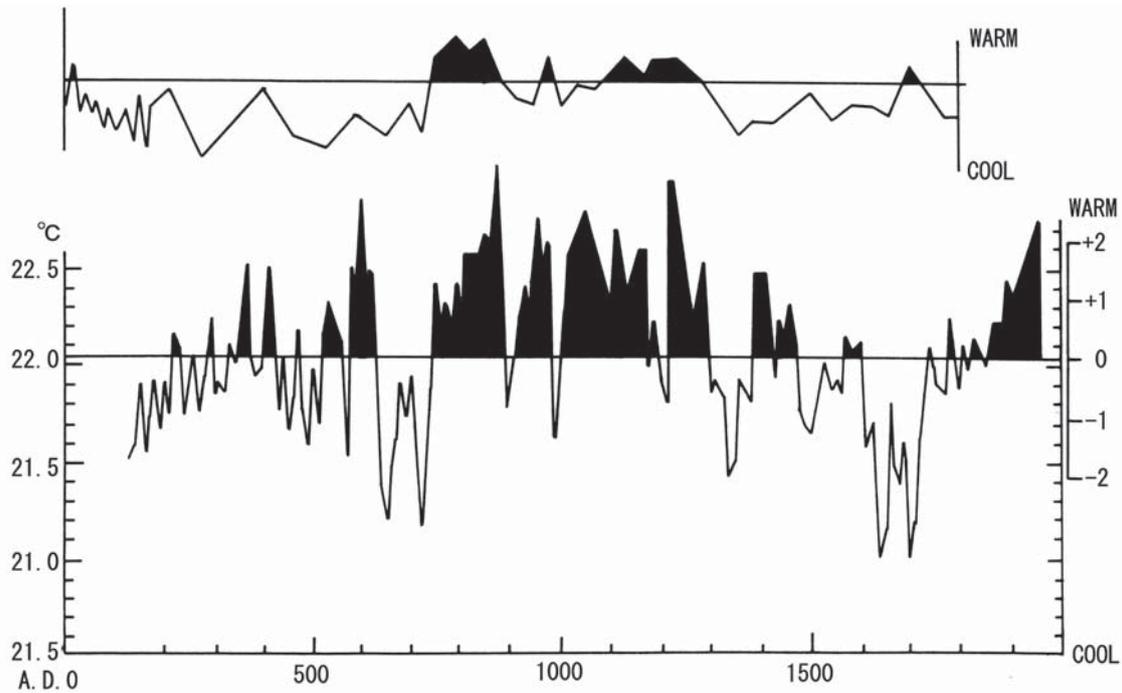


図1 過去2000年間の気候変動（北川浩之 1995 阪口豊 1993 を一部改変）

海水面の影響もあり、古新田の開発が本格化するようになる。中世後半に古新田の開発が成功するためには、気候の寒冷化と人為的な森林破壊や海水面の低下、さらには塩堤の築造、そのための労働力など様々な条件が満たされることが必要であった。これらの条件が満たされない段階には、河川最下流部における土地開発は失敗に終わっている。たとえば、三重県の宮川河口における開発の試みなどは、その例といえよう（黒田日出男 1984）¹⁹⁾。

Ⅳ 島島の形成と木綿作・アブラナ作

1972年に発生した大東水害をきっかけに、大阪河内平野においては、それまでの雨水をなるべく早く海に流そうとする治水方針を改め、洪水の起きやすい河川沿いに治水緑地を造り、一時的に雨水をそこに貯めることで、下流域の洪水や水害を減らそうと方針転換がはかられた。縄文海進の河内湾の名残で、江戸時代まで深野池ふこうのいけが残存しており、町人請負新田として鴻池新田として干拓された地域では、家電メーカーやその下請けなどが企業城下町を形成している。しかもこの地域は1960-70年代にかけて軟弱地盤や地下水の汲み上げに起因する地盤沈下で2-1mも標高が低くなり、いわゆる0m地域を形成するようになった。そのため河床の掘削を行っても、雨水は海に排水が困難になっていた（図2）。

池島・福万寺遺跡は、旧大和川の分流である玉串川と排水河川の恩地川との間に設けられた治水緑地造成に先だって調査された。池島治水緑地の規模は、面積およそ90000m²、ちょうど条里型土地割の3町×3町であり、深さは地表から約4mまでであった。この地域には池島条里遺構と言われる水田の区画が広がっており、1975～1980年代は水田発掘ブームもあり、現地表面から技術的に発掘可能なすべての地表面を調査することになった。

1704年に西に向けて流路の人工的な変更が行われるまで、河内平野には大和川の分流が3筋に分

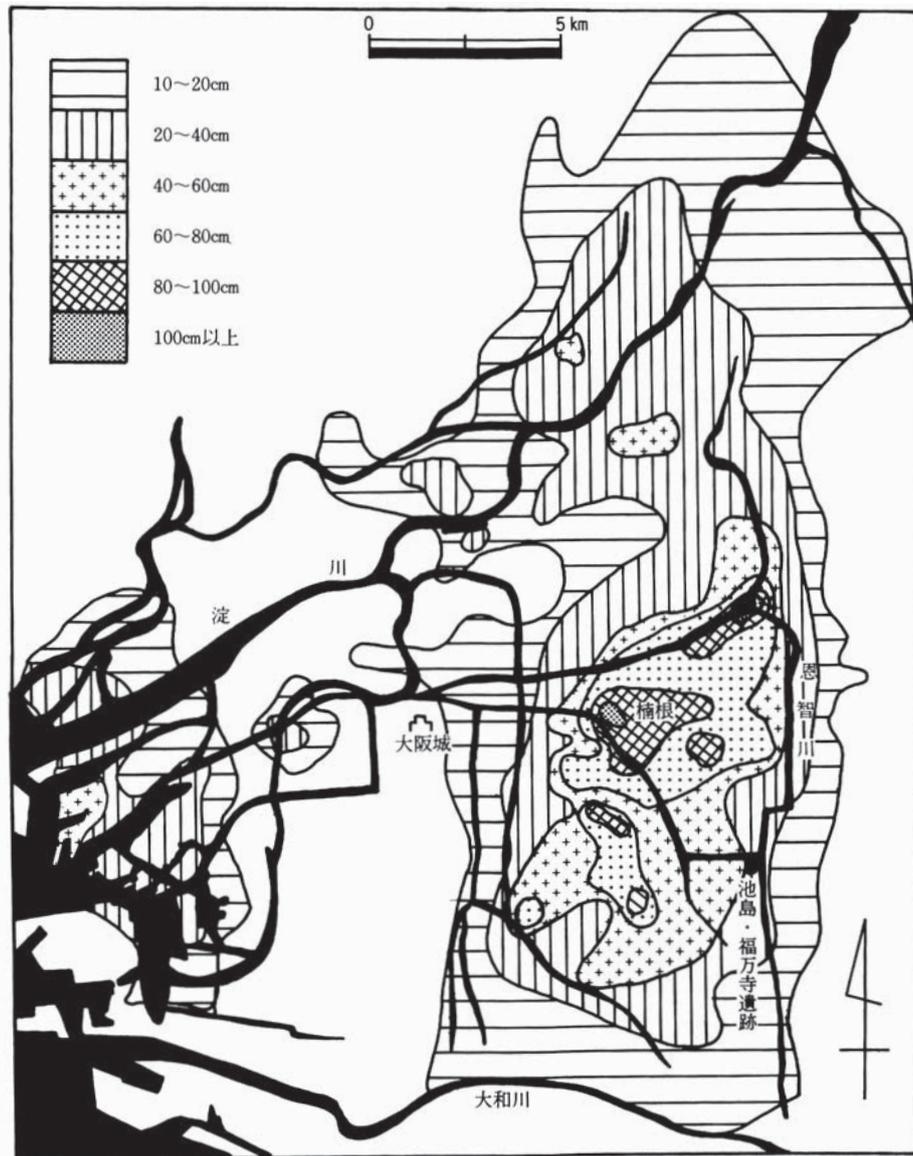


図2 地盤沈下する河内平野

かれて北流していた。それらの川筋はいずれも天井川化しており、大規模自然堤防部分には河内木綿が作られており、近世以降、大阪の基幹産業である繊維産業を支えていた。また、この地域には水田の中に島畠（半田、かき揚げ田などの別称あり）と呼ばれる島状の畠が耕作されていたり、島畠と島畠の間には堀田と呼ばれる小さな池が掘削されたりしている場合もある（図3）。

筆者は、大阪文化財センターが治水緑地の造成にあたり池島・福万寺遺跡の発掘することが決定した時から調査に参加した。池島・福万寺遺跡では1) 旧地表面の確認 2) 調査可能な旧地表面の検討 3) 発掘調査する地表面の決定という手順で調査が進められた。一般には、3段階の検討が十分行われることなく、試掘調査において遺物や遺構が発見されたところが本格的に発掘調査されることが多い。ところが、ここでは1975年以降に群馬県において火山噴出物に覆われた水田や畠などの調査が注目されていたことや、この遺跡が従来から池島条里遺構と呼ばれていたことなどが幸いして1) 2) 3) の手順で、可能な限りの旧地表面を広域にわたり発掘調査することができた。しかも、現地表面からおよそ4mの調査を実施することができた。その結果、これまでにない画期的な発掘調査となった。すなわち、池島・福万寺遺跡では現地表面下4mまでに、河川の洪水に埋もれた十数



図3 島島と堀田

面の旧地表面が確認された。また、河川の洪水は下部では生駒山地から流れ下る小河川の洪水が主であり、洪水堆積物と洪水堆積物との間には、弥生時代中期から古墳時代にかけての不定形小区画水田が拓かれていたことが判った。この調査以前の、大阪中央環状線の道路工事に伴う発掘調査では瓜生堂遺跡などで集落や方形周溝墓などは発見されていたものの水田遺構は発見されておらず、水田耕土にあたる地層は、小海進か下流部における砂堆の形成により、排水不良の湿地のものともみなされ、集落や墓地が水没し消滅したと考えられていた（安田喜憲 1977・1984 など）²⁰。そして、不定形小区画水田（図4）から条里型水田への転換した時代には、生駒山地から流下する小河川の洪水も、遺跡の西側に位置したと思われる旧大和川の分流である玉串川も顕著な洪水の地層を残していない。この傾向は、滋賀県の^{しもなが}下長遺跡などでも認められている。おそらくは、河川の洪水の主体が、より下流域に移動したことにより、池島・福万寺遺跡付近は「堆積の場」ではなくなり、むしろ「侵食の場」となったと考えられる（高橋 学 1994）²¹。そして、この地域においては、中世は洪水の影響の少ない地表面として安定した水田の時代であった（高橋 学 1996）²²。

ところが、中世後半から末になると、遺跡の西側に位置する玉串川が大規模な洪水を起こすようになり、主として花こう岩起源の砂で自然堤防が形成されたのである。そのような場所では、水田耕作の維持が不可能になり、条里型土地割でありながらその一部で畠が作られるようになったのである。この島島部分には、当初、イネの代わりに危急作物としてソバが栽培された（図5）（外山秀一ほか 1992）²³。一度、高畝の島島が造成されると、それが洪水の際に障害となり、島島には洪水堆積物が付加して規模が大きくなっていった（図6a、6b）。そして、島島には木綿やアブラナなど商品作物が栽培されるようになった。また、島島の畝間にはイネが栽培された。しかし、玉串川の流路が人工的に固定されると、大規模自然堤防の形成により、天井川化が進行し河床が著しく高くなっていった。そのため、これまで条里型水田であったり、一部島島となっていたりしたところで、相対的に排水不良となり水田の一部が掘削され堀田として利用されるところも出てきた。堀田では、野



図4 不定形小区画水田（池島・福万寺遺跡）大阪文化財センター

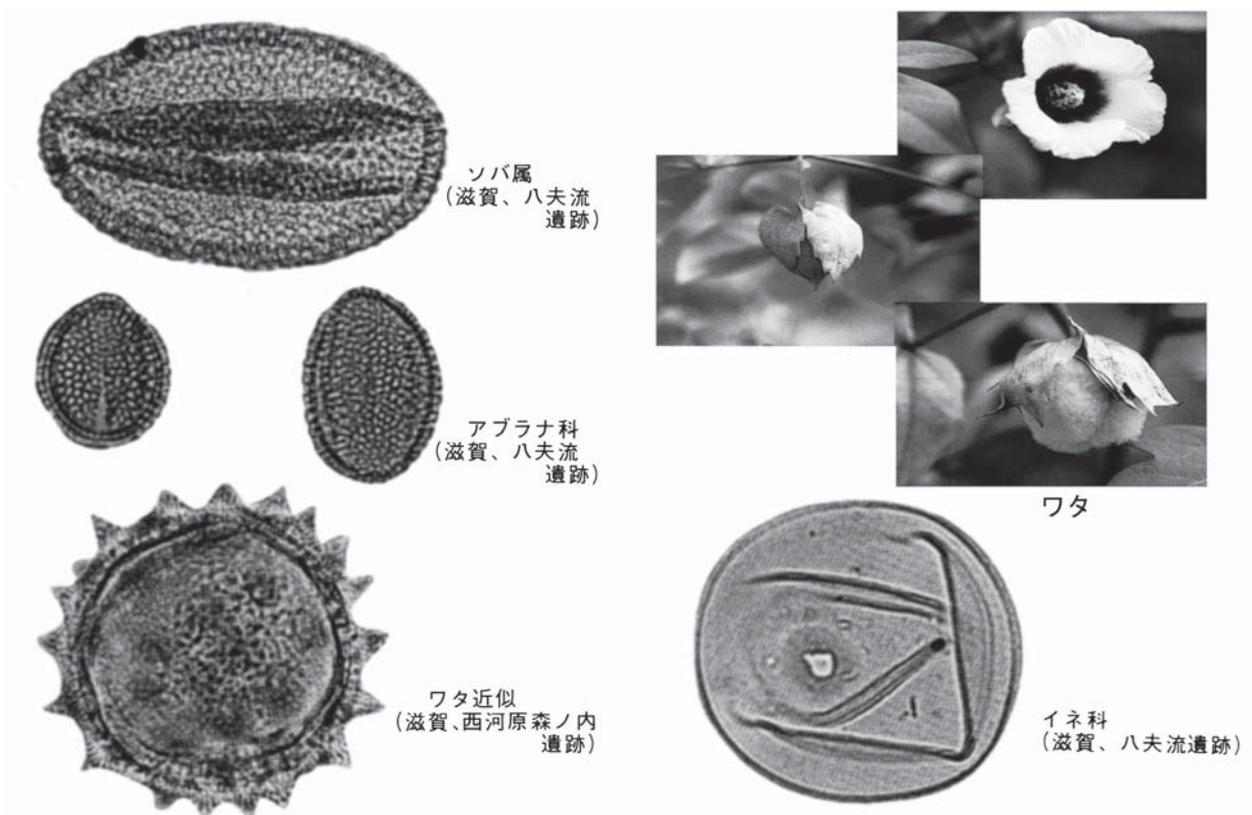


図5 島島で栽培された作物（ソバ、ワタ、アブラナ）外山秀一ほか 1992

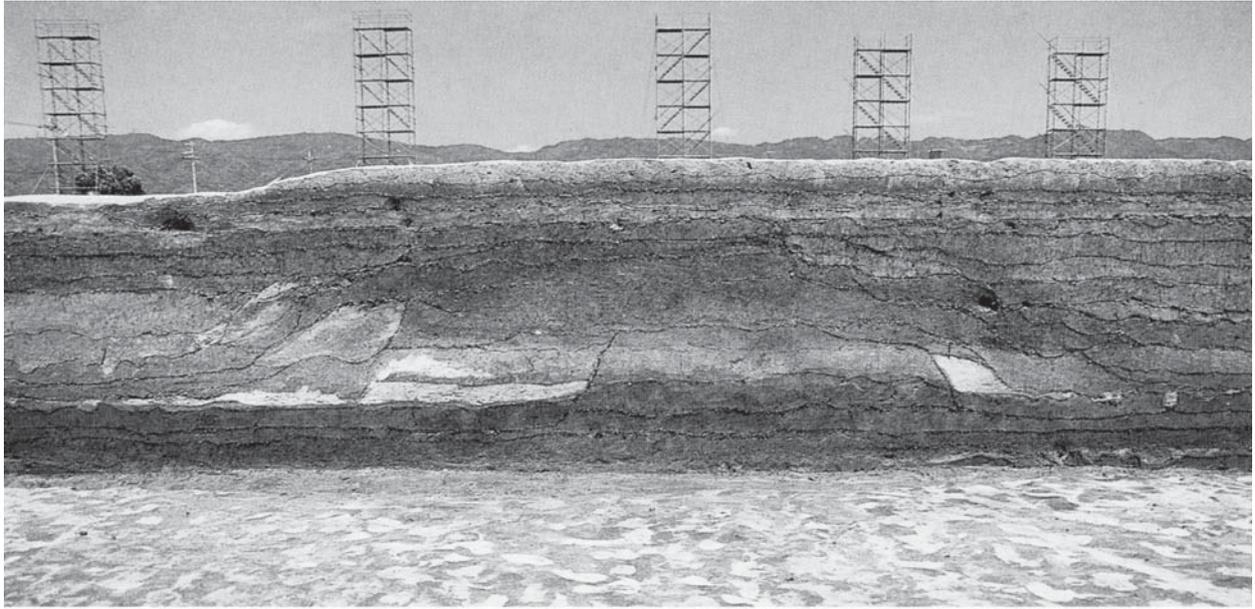


図 6a 拡大する島畠の断面（池島・福万寺遺跡）大阪文化財センター

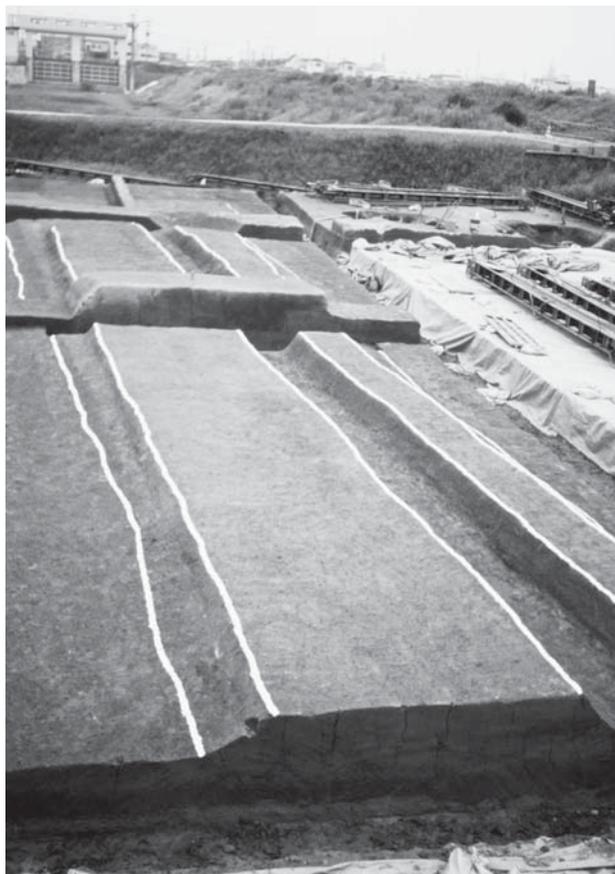


図 6b 島畠（池島・福万寺遺跡）大阪文化財センター

井戸だけでは、著しく不足する灌漑用水をため、池底に溜まった泥を肥料とすることもできた。また、相対的に排水不良になった条里型水田の地下水位を下げ土地生産性を上げるとともに、フナやアユモドキなどを飼うことで、水田地域で不足しがちなタンパク質を補うことも可能になった。さらに、魚類などのフンなどが堀の底に溜まり、良質な肥料として利用できたのである。一般に中世

の水田は、洪水に被覆され地表面の更新が行われにくくなったり、二毛作の進展など土地からの収奪が激しくなったりしたのに対し、施肥は草木灰に依存するしかなく、老朽化していたと考えられる（高橋 学1996）²⁴⁾。

さて、便所遺構は藤原京や鴻臚館などで確認されている²⁵⁾。また、寺院建築に「東司」として確認できるものの、人糞尿が田畠の肥料として用いられるようになった記録は近世以前には乏しい。ヨーロッパにおいて家畜のフンが肥料として用いられたことは知られているものの人糞尿が肥料に用いられた記述は管見の限りにおいて存在しない。中国、韓国、琉球列島では「猪厠」あるいは「良」などと呼ばれる人糞をブタや池の魚の餌とすることは漢代以前から知られており（図7）、今でも観ることができるが、水田や畠の肥料とした記録はみられない。農書の研究で著名な有蘭正一郎によれば、12世紀の『陳勇農書』に小便を肥料とした記録があるという（大沢正昭1993）²⁶⁾。日本における人糞尿の肥料としての利用は鎌倉時代に遡るとい説があるが根拠が示されていない（樋口清之2014）²⁷⁾。しかし、平安時代末から鎌倉時代初頭の『餓鬼草子』には道路で排泄する人々が描かれている（図8）（小松茂美1994）²⁸⁾。

人糞尿の肥料としての利用は、世界史的視点に立つと、かなり特異なものといえる。人糞尿を肥料とするためには、そのままの状態では田畠に入れると根腐れが発生するため、便所や野ツボに一時ストックして発酵させる必要がある。人糞尿肥料としての利用は、近世や近代の日本においては、極めて常識的なものであったと言えよう。ところで、発掘調査において庶民の住居に便所が確認されているのは、信長によって1573（天正元）年9月に滅ぼされた一乗谷朝倉氏遺跡の住居である（太田区立郷土博物館1997）²⁹⁾。ここでは屋内の三和土に石組みの井戸が、屋外に石組みの便所が確認されている（図9）。



図7 猪厠（四川省考古博物館）



図8 路上で排泄する人々（餓鬼草子：東京国立博物館所蔵の一部）



図9 一乗谷朝倉氏遺跡便所遺構

さて、島島に夏作物として木綿、冬作物としてアブラナなどを栽培されたと考えられるが、そのためには十分な灌漑用水と肥料とが必要である。木綿の栽培については、『日本後紀』に799（延暦18）年三河国に漂着した崑崙人自称天竺人が綿種をもたらしたが、これは定着せず中絶したらしい（柳田国男1955）³⁰。そして、朝鮮半島を経て輸入された1510（永正7）年に以降に、木綿や綿の本格的な普及し始めた。木綿栽培は、流域の地質が花こう岩で自然堤防の形成が盛んであった矢作川流

域から始まり、島畠の造成とほぼ軌を一にしていたと思われる。金田章裕（1976）³¹⁾は、濃尾平野における島畑（畠）の形成が12世紀には、まだ進んでおらず14世紀末には認められるとしているが、自然堤防の形成などとの関係にまでは十分論及はできていない。その後、考古学の発掘調査と関連する中で、自然堤防の形成時期の検討が進み、現在の25000分1地形図や2万分1空中写真で容易に判読できるような自然堤防や大規模自然堤防の形成時期は、弥生時代・古墳時代のものと区別され中世以降のものであることが判明している（高橋 学1994）³²⁾。

さて、信長は4人の配下の武将の特徴を示す「木綿藤吉、米五郎左、懸かれ柴田に、退き佐久間」という表現を使用した。すなわち、信長は後の秀吉のことを、非常に丈夫で使い勝手が良い木綿のようだと評価していたのである。その時期は、秀吉が信長に仕えた頃から、1567年の美濃調略の成功し、浅井の裏切りで危機一髪になりながらも殿を務め金ヶ崎からの脱出、その後、小谷城の浅井氏攻めなどで手柄をたてて長浜城主となり1573（天正3）年に羽柴秀吉と呼び名を変えるまでと考えられる。この段階には明智光秀はまだ出てきていない点でも時期が推察できよう。

これらのことから、16世紀中頃には、木綿の存在は知られており、便利さが注目されていたことが考えられる。この時代の気候の寒冷化により、それまで一般庶民に多く衣服に用いられてきた麻は保温性に欠け、その点でも綿入れが可能な木綿は重宝がられたと思われる。また、肌触りが柔らかく、絹のように染色可能なことも木綿が喜ばれた理由であった。

V 正徳寺の会見

信長の父信秀は、斎藤道三と加納口で戦い敗れていた（1544（天文13）年、もしくは1547（天文16）年）。また、信秀の弱体化をみて、まだ統一されていない尾張に不穏な空気が流れた。そこで、東の今川への備えとして、信秀の手で信長と斎藤道三の娘の帰蝶（濃姫）との政略結婚が決められ、1549（天文18）年に輿入れがなされたらしい。しかし、案の定、犬山城主織田信清が、今川氏と手を結び犬山の乱（1550（天文19）年）を起こした。そして、これを抑えたのを最後に、信秀は病に倒れ、信長が後継者となった。その後、信秀は祈祷や治療の甲斐なく1552（天文21）年頃に死去した³³⁾。信秀は生前に大須万松寺を用意しており、ここで盛大な葬儀が行われたが、後継者の信長は正装もせず、仏前に抹香を投げつけるという蛮行にでた。それを目にした弟の信行や家来、僧侶たちは信長を「大うつけ」との認識を新たにしたという。そして、1553（天文22）年には、信長の常識外れの行動に責任を感じた守役の平手政秀が自刃した。

さて、1553（天文22）年4月下旬になると、舅の斎藤道三から娘婿の信長に「富田の寺内町正徳寺で会いたい。」との連絡があった。そこで信長は木曾川、飛騨川を船で越えて道三に会いに出かけた。現在、正徳寺（聖徳寺）は木曾川の左岸、愛知県一宮市に遺構が存在しており清洲から正徳寺に行くのに木曾川を超える必要はない。木曾川は1608年に改修されるまでは一之枝川、二之枝川、三之枝川と言ったように分流しており、『信長公記』に記されている木曾川は分流のひとつであったと思われる。

この時、道三は周囲が「婿殿はおおうつけ」という真偽を確かめたいとの気持ちがあったという。そこで部下たちに上品な身支度をさせ、正徳寺の御堂の縁に並ばせ、信長を驚かせ笑ってやろうとの意図があった。そこで準備をおえた道三は、信長一行がやってくるのを街角の小屋に潜んでのぞ

き見をしていたらしい。

そこに現れた信長のいでたちは、案の定、火薬入れのようなヒョウタンを腰の周りに七つ八つもぶら下げた、かなり常識外れのものであった。お供の衆は7、800人ほど。柄三間半（約6.3m）の朱槍500本、弓・鉄砲500挺を持たせ、元気な足輕を行列の前を走らせていた。さらに『信長公記』にはない記述であるが、江村専齋『老人雑話』（1710（宝永7）年）には「・・・廣袖の湯帷子に陰形を大染付たるを着し・・・」とある³⁴⁾。

筆者はこの記述に注目した。江村専齋は正徳寺の会見時にはまだ生まれていないが、信長が亡くなった本能寺の変が起きた1582（天正10）年に生きていた人物である。湯帷子は通常、麻でできた浴衣のことをさす。その背に大きく「陰形」が染め付けられていたというのである。会見の場所は、木曾川が自然堤防を形成している地域であったことも後に述べるように重要である。

正徳寺につくと、信長は髪を折り曲げに結い、褐色の長袴をはき、小刀をさすという正装に着替え、道三との会見を無事済ませる。この様子を見た道三は、「近頃のうつけぶりはわざと装ったもの」と知り、また、斎藤勢の槍が短いことと比較して、信長の度量を見抜いたのである。すなわち、従来の馬上の一騎打ちに代表される中世的戦い方から、信長の戦いの意識は既に脱していたのである。信長は、足輕、長槍、弓という集団戦の有利さを知っており、しかも1543年頃に伝来し、それからさほど時期の経っていない時期に目立つほどの数の火縄銃を持ち、ヒョウタンに火薬を入れて持ち歩くところまで熟知していることに道三は気づいたのである。自分もしくは父が京都大山崎八幡の座につながるエゴマ商人³⁵⁾であり、楽市楽座を先駆けて実施していた経験から、信長が祖父の代から津島湊の商人を味方につけていることを正徳寺の会見の接待役で、津島商人の元締めであった堀田道空を通して知ったと思われる。道三は信長の中に銭の時代の到来や、津島商人の二男三男を馬回り衆として常設軍の設置する先見性を観ぬいたと思われる³⁶⁾。

Ⅵ 信長の尾張支配と小牧城の築造

1548（天文17）年、斎藤道三と信秀との和議が成立した。信長は道三の娘である帰蝶（濃姫）との婚約し、翌1549（天文18）年輿入れが行われたらしい。この年に信秀は、第二次小豆坂の戦いと第三次安祥城の戦いで敗れ、人質となっていた長男の信広と松平竹千代（後の徳川家康）との人質交換をした。さらに、1550（天文19）年になると、犬山城主織田信清は、今川と手を結び反乱（犬山の乱）を起こした。信秀は、これにはかろうじて勝利したものの、今川は5万の大軍で攻めよせて、鳴海城をはじめ知多郡や愛知郡を調略した。このような困難が続く中、信秀は、1552（天文21）年3月3日、末森城で死去した。信長の周囲は、今川だけでなく織田一族にも敵に満ちており、家督を継ぐのを宣言するのは容易ではなかったと思われる。甲斐の武田信玄の場合も、その死は約3年秘密とされ、その後に勝頼が後継者となった例をみても、世代交代の難しさが想像できよう。

その中で正徳寺の会見以降、信長の能力を見込んだ斎藤道三は、信長の村木城攻めにあたり頼もしい味方となっている。また、斎藤道三は息子義龍との戦いに敗れる際に、信長に美濃国を譲るといふ書状を残している点でも、道三と信長の血をこえた信頼関係は類推できる。

信長の家系は、駿河の今川氏や甲斐の武田氏のような守護には遠く及ばない。尾張国の守護は斯波しば義統よしかねやその子義銀よしかねであった。そして、尾張上四郡の守護代は岩倉城の織田伊勢守家（信安やその子信

賢)。尾張下四郡の守護代は清洲城の織田大和家（信友・守護又代坂井大膳）。信長の家である織田弾正忠家は、織田下四郡守護代の清洲三奉行の内のひとつに過ぎなかった。しかも庶子の兄信広は今川氏との戦いで既に力を見限られていたものの、実弟の信行（信勝）は聡明な若者として実母の土御前や柴田勝家などの重臣が味方していた。信長は、家督を信秀から受け継いだというものの、今川はもちろん、身内も含め敵だらけであった。1550（天文19）年1月、犬山城主織田信清が今川氏と手を組んで起こした犬山の乱はなんとか父の信秀が抑えたが、信長が家督相続して以来、1552（天文21）年の鳴海城山口左馬之助教継の今川方への造反、そして清洲の守護代織田大和守や岩倉の守護代織田伊勢守などとの一族との闘争が相次ぎ、1560（永禄3）年5月19日に起きた今川義元との桶狭間の戦いまで一時も休まることはなかった。

桶狭間の戦いが終わり、1563（永禄6）年7月には、美濃攻めの準備として清洲から楽田（現犬山市）へ城を移転させる下見が行われ、実際には小牧山へ城を移した。尾張統一がほぼ終了したのである。かつて、信秀に反抗した犬山城主織田信清は、信長の妹？と婚姻し、1558（永禄元）年の織田伊勢守との浮野の戦い時には、信清は信長の配下となっていた。このため、信長は楽田への城の移動も提案できたのである。

この前後、信長は清洲城から生駒屋敷（小折城：現江南市布袋、図10）へしばしば出入りしていた。生駒氏は灰や油を商い、馬借業で財を蓄え、諸国から色々な人物が出入りしていたらしい。その中に木曾川流域の川並衆を束ねる蜂須賀小六や前野将右衛門なども混じっていた。そして、生駒屋敷

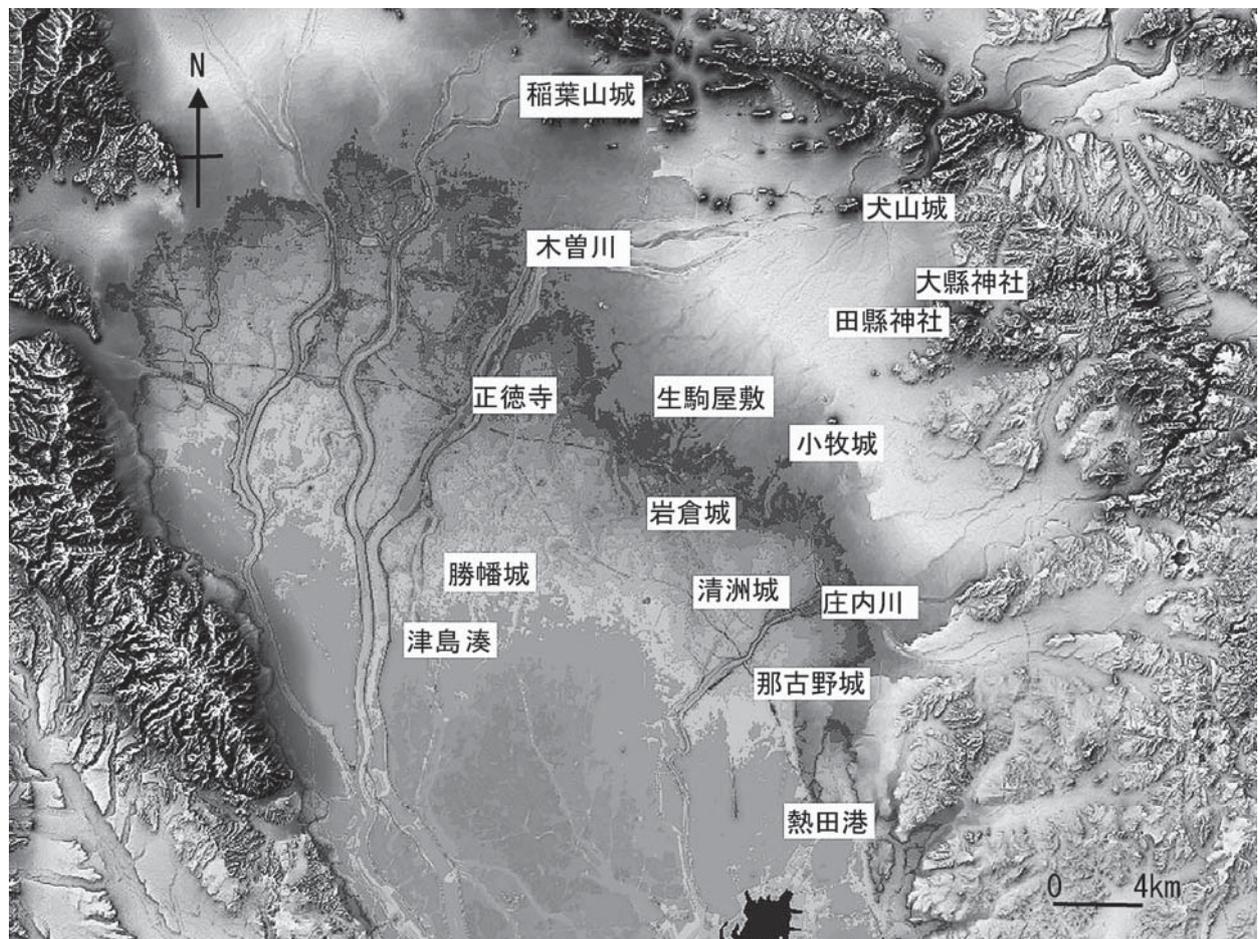


図10 正徳寺・生駒屋敷・大縣神社・田縣神社・小牧城など

に出入りする信長の前に吉乃が現れる。吉乃は、一度、土田氏（信長の母の縁者か？）に嫁いていたが、夫が明智合戦（1556（弘治元）年）で戦死したため、兄の住む生駒屋敷に帰ってきていた。そこで吉乃が信長に見初められて側室となり、嫡男・信忠、二男・信雄、長女・五徳を産んだ。また、木下藤吉郎も生駒屋敷に寄宿し、吉乃の取りなしで信長に仕えることになったという。

信長は祖父信定や父信秀と同様に、伊勢湾海運で重要な津島湊の15家筆頭の堀田家（正貞や道空）、熱田港の加藤家（順盛や信政）、熱田神宮、さらには伊勢内宮（皇大神宮）を抑え、伊勢湾海運による利益に依存していた。そして、内陸の自然堤防の発達している地域の生駒屋敷では、尾張内外の地域の情報を得たり、灰や油の利益にも依存したりした可能性がある。ここでの灰は肥料や染め物の原料として、油はアブラナによるナタネ油と考えられる。

1563（永禄6）年、信長は、道三の孫龍興の美濃攻めのため、佐久間信盛に命じ、小牧山に、初めてチャートやホルンフェルスの石垣を持つ城を築城させ、南麓に城下町を整備した。城下町には配下の家臣群を住ませ、これまでの中世的な「一領具足制（長曾我部）」や「寄家寄子制（今川）」のような兵農未分離状態からの脱却し、農民とは分離された専用軍を具現化した。そこには、津島商人の二男三男などが参集した。信長が使用した幟は、織田木瓜が良く知られているが、黄地に永楽銭を染め抜いたものもある。このことは、信長が貨幣経済の時代が到来することを認識していたことを示すと考えられよう。

そして、1567（永禄10）年に稲葉山城（のちの岐阜城）を攻め落として、城と城下町を造り岐阜と名称変更するまで、4年間を小牧山城で過ごした。その間に、信長との間に3人の子をなした吉乃は正室扱いを受けながらここで死亡したという。

Ⅶ 大縣神社と田縣神社豊年祭

斎藤道三が義龍と戦い1556（弘治2）年4月に死亡した頃から、信長は生駒屋敷（小折城）の吉乃のところに足しげく通った。そして、信長は吉乃との間に奇妙（信忠）、於茶筌（信雄）、於徳の3人の子をなした。信長と帰蝶（濃姫）との間については、先にも述べたように婚姻の年すら史料上明確でない。また、結婚後どのような生活をしたのかもほとんど不明である。斎藤道三の娘であり、信長の正室であるにもかかわらず、子供を産まなかったこともあり、『信長公記』には記述がなく不明である。まして、吉乃に関する記録は極めて少ない。

また、信長は「踊り」を好み、津島の堀田道空の邸や生駒屋敷などでもたびたび無礼講の踊りを催して自らも参加している。このような踊りの際、赤松啓介（2004）³⁷や下川耽史（2011）³⁸が言うように乱交になるのがあたり前であった。

1558（永禄元）年あるいは1559（永禄2）年になると、尾張のほとんどは統一された。そして、1563（永禄6）年7月に信長は、楽田（現犬山市）へ、美濃攻めのために清洲から本拠地を移す下見に出ている。

この本宮山の麓には、尾張国二宮大縣神社が鎮座している。大縣神社の境内には摂社の姫之宮があり、玉比売命と倉稲魂神が祭られている。ここには陰陽石の信仰があり、本殿の背後に「姫石」が安置されている。姫乃宮は、今でも五穀豊穡や女性の守護神として信仰を集めている。また、姫之宮の豊年祭は「於祖々祭（おそそ祭）」と呼ばれ、田縣神社（小牧市田県町）の豊年祭（「扁之古祭（へこの祭）」）と対になるもので、かつては同じ3月15日（旧暦1月15日）に、女陰や男根を象った

神輿を中心とする神幸行列が行われていた（図11）。

田縣神社の祭神は御歳神^{みとしのかみ}である。農業をつかさどる神様で五穀豊穡、子孫繁栄の神であり、後に玉姫命が合祀されたという。毎年、長さ約2.5m、直径50-60cm、重さ約300kgの木曾ヒノキから大男^{おおおわ}茎形^{せがた}を彫り、お供え物として豊作を祈願する。この大男茎形は毎年作成され3月15日の豊年祭の時に「陽物神輿^{ようぶつみこし}」として42歳の厄男たちに担がれて奉納される（図12）。御輿には鳳輦^{ほうれん}と御前御輿^{ごぜんみこし}と陽物御輿という3種類があり、鳳輦には祭神「御歳神」が御輿に納められている。また、御前御輿には祭神玉姫命の背君「建稲種尊^{たけいなたわのみこと}」の御神像を納め、陽物御輿には、お供え物の「大男茎形」を御輿に納め担ぐ。男達が男根をかたどった神輿を担いで練り歩き、御供（5人衆）と呼ばれる巫女たち

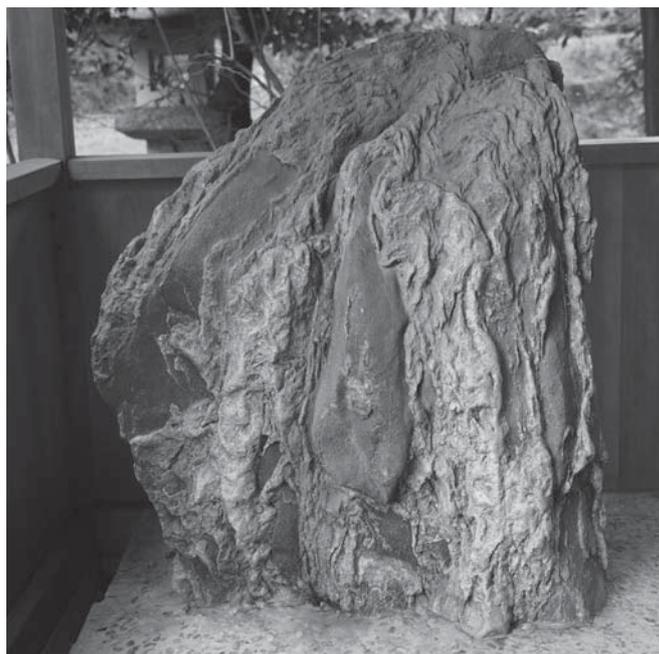


図11 大縣神社姫の宮「姫石」



図12 田縣神社「大男茎形」

が小ぶりな男根をかたどったものを抱えて歩く。そして、それに触れると、子どもを授かると言われている。五穀豊穡と子孫繁栄とを祈願する祭りである。

この中で、特に注目されるのは、**図 13** に示した陣羽織を着た「先行」6人と「参列」6人に挟まれて歩く「大幟」である。神輿行列で、陣羽織を着た「先行」「大幟」「参列」部分は、他の神輿行列が男性は「烏帽子」と「直衣」または「水干」、女性は「袷」など平安時代の衣服であるのに対し、「陣羽織」は戦国時代のものであると考えられ異質である。

大幟には、墨と朱で大男茎形が描かれており、毎年同じものが使用される。田縣神社に残る先代の大幟を詳しく観察すると、幟部分は麻布であり、それに対して竿につける「乳」部分は木綿布と木綿糸であり、明らかに幟部分より新しく補修したものであることが判る。「乳」は横の棒に5カ所、竿には11カ所ついている。通常、幟は横が陰陽五行で5カ所、縦は十二支で12カ所である³⁹⁾。幟は神の依代であり竿にいくつでも良いというものではない(図 14)。

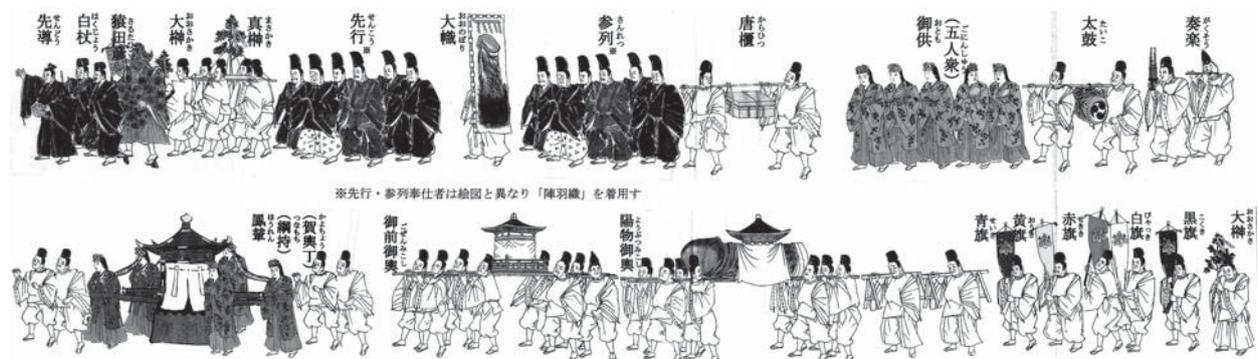


図 13 田縣神社豊年祭列



図 14 田縣神社大男茎形大幟

ここで、道三と信長の正徳寺の会見を思い起こすと、信長は麻の湯帷子の背に大きく「陰形」を描いていた。田縣神社の大幟の大男莖形はこれを想起させる。しかも自然堤防の発達が良いところでみられる島畠で栽培されていた木綿も乳の修復に使われている。

興入れしてきた帰蝶（濃姫）との間には子供ができなかったが、吉乃との間には2男1女を授かっている。小氷期にあたるこの時期に、信長が五穀豊穰や子孫繁栄を望んだことは間違いないであろう。先に述べた「踊り」も一連のものであったと思われる。

また、道三やその父親は、大山崎離宮八幡のエゴマ油座の商人であった。これに対して、吉乃の実家である生駒家は、灰や油を手広く商っていた。灰は肥料や染め物に、また油は座が大きな力を持っていたエゴマ油ではなく、この頃、島畠で栽培が普及してきたアブラナからとれるナタネ油と考えられる。側室となった吉乃は、信長の寵愛を受けて、信長の幼名吉法師から吉乃と呼ばれたらしい。道三が死亡し、吉乃が子供を続けて身ごもったのも新しい時代の到来を暗示すると信長には考えられたのであろう。座の特権商人の否定、いいかえれば楽市楽座の導入は、道三や信長が中世のシステムから新しい近世的なシステムへの過渡期をなした。兵農を分離し、津島商人の二男三男を中心に馬回りと呼ばれる常設軍を設けたのも新しい時代の到来を意味していた。

さらに、麻に比べて肌触りが良く、綿を入れれば暖かくできたり、絹のように染めやすい木綿も島畠で栽培が進みつつあった。木綿栽培は、木曾川の本流および分流の堆積作用が盛んな濃尾平野の中央部に、まさにうってつけの作物であったといえよう。信長は清洲城や岩倉城を攻め、さらに層状チャートやそれが接触熱変成でホルンフェルスとなった地層から構成される小牧山に石垣や大手口を築き、背割り溝を持った城下町の整備を行った。そして、自領となった大縣神社、田縣神社で豊穰や子孫繁栄を祈った。その際、伝統的な豊年祭りに「陣羽織」を着た一群が豊年祭の神輿行列に組み込まれたと考えられる。豊年祭の行列に、古くからの伝統的な要素と、信長の時代に付け加わった要素とを読み取りたい。これらのことは、田縣神社の境内から一緒に出土した宝物の短剣、女性器を描いた茶器の水差などとも矛盾しない。さらに、一乗谷朝倉氏遺跡で確認されている便所の普及と島畠耕作における人糞尿の肥料としての利用を推測可能にする。

小結

小氷期の開始とともに、領主階級は兵農未分離の土豪などを招集し、食糧（料）を求めて、隣接する領土の攻め入り、戦国時代が本格化した。領土争いに勝った場合、身分の上の者は領土を切り取り新たな土地などを得ることができたが、身分の下の方には、日時を限って乱暴狼藉による人の拉致や田や畠における刈り取り自由などが褒賞とされた。

また、この時期には都などの都市や相対的に温暖な土地へ、食い詰めた流民が流入し、飢饉がよりひどくなることもあった。

小氷期には、生活用の燃料や、^{かななが}鉄穴流しやタタラ製鉄、製塩、窯業の発展により里山を中心に山地の植生が破壊され、禿山や二次林のアカマツ林が急速に広がった。このような植生破壊は気候の寒冷化とともに大規模自然堤防の形成を促し、島畠や堀田が耕作されるようになった。島畠や堀田では、最初は危急作物としてソバが栽培されたが、徐々に木綿やアブラナなどの商品作物が栽培されるようになった。

木綿は肌触りが良いだけでなく、染色も容易な上に、綿入れを作れることで、麻に比べて温かく便利であった。また、アブラナから採れるナタネ油は、大山崎離宮八幡のエゴマ油の座のように中

世的制約から自由であった。しかし、木綿やアブラナの栽培には、灌漑用水や人糞尿に代表される肥料が必要であった。16世紀には、一乗谷朝倉氏遺跡では、一戸ごとに井戸と便所が存在していることが確認されており、人糞尿の肥料としての利用が可能になっていたことが判る。

信長は、舅の斎藤道三と正徳寺で会見する際、背に「大陰形」を描いた湯帷子を着ていた。さらに火薬をつめるようなヒョウタンを腰に下げ、足軽を走らせ、集団戦に向けた長槍や弓、それに伝来して間もない鉄砲をそろえた戦闘専門集団を多数連れていた。それをみた道三は、信長の先見性に驚き、信長の心強い味方となったと考えられる。

また、信長は、正室婦蝶（濃姫）との間に子がなく、道三が死亡すると、生駒屋敷へと足しげく通うようになり、吉乃との間に、長男、次男、長女をもうけた。また、無礼講で「踊り」を催した。「踊り」は、フリーセックスと同義であり、次にあげる五穀豊穡、子孫繁栄を祈念するものでもあったと思われる。

信長は尾張をほぼ統一した時、清洲から美濃攻めのために小牧山に拠点を移し、石垣のある城や城下町を造った。さらに、支配下の大縣神社（「於祖々祭（おそそ祭）」）や田縣神社（「扁之古祭（へこの祭）」）において、五穀豊穡や子孫繁栄を祈念した3月15日（初春）の豊年祭を盛んにしたと考えられる。そのことは、特に、田縣神社の「大男莖形」を描いた麻の大幟（木綿の乳）やその前後を守る先行6人と参列6人隊列の陣羽織を着た一団から想像することができる。

1552（天文21）年頃、父信秀が死亡し、信長のあと目相続はスムーズにはいかなかった。特に、清洲城の織田伊勢守一族、岩倉城の織田大和守一族といった血縁者の間で血みどろの争いが頻発した。信長にとっては、対外的な争いよりも辛いものであったかもしれない。

この時期、今川義元は太原崇孚雪斎を失い、1560（永禄3）年の桶狭間の戦いまでの5年間を無為に時を過ごしてしまった。冷静に見た場合、このことが、義元の失敗であったといえる。あるいは、今川義元には「海道一の弓取り」と言われるような力はなく、名宰相太原崇孚雪斎なしには凡庸な人物であったのかもしれない。

注

- 1) 高橋 学 (1994) 「古代末以降における地形環境の変貌と土地開発」、日本史研究 380、33-49
- 2) 磯貝富士夫 (2002) 『中世の農業と気候－水田二毛作の展開－』、吉川弘文館
- 3) 井関弘太郎 (1983) 『沖積平野』、東京大学出版会
- 4) 小野忠熙 (1980) 『日本考古地理学』、ニューサイエンス社
- 5) 橋本政良 (2002) 『環境歴史学の視座』、岩田書店
橋本政良 (2005) 『環境歴史学の探求』、岩田書店
- 6) 飯沼健司 (2004) 『環境歴史学とはなにか』、山川出版
- 7) 井上勲編 (2004) 『日本史の環境』、吉川弘文館
- 8) 水野章二 (2009) 『中世の人と自然の関係史』、吉川弘文館
- 9) 水島司編 (2010) 『環境と歴史学』、勉誠出版
- 10) 北川浩之 (1995) 「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」、吉野正敏・安田喜憲編 『歴史と気候』、朝倉書店
- 11) 阪口 豊 (1993) 「過去 8000 年の気候変化と人間の歴史」、専修人文論集 51、47-55
- 12) 桜井邦明 (1987) 『太陽黒点が語る文明史－「小氷期」と近代の成立』、中公新書 845
- 13) 高橋 学 (2016) 「環境史からみた信長の時代Ⅰ－桶狭間の戦い－」、立命館文学 645、164-189
- 14) 太田牛一 (1605 頃)・中川太古訳 (2013) 『現代語訳信長公記』、新人物文庫
- 15) 小瀬甫庵 『信長記』 (1622)・神郡周校注 (1981) 『信長記 (上下)』、現代思潮新社

- 16) 吉田蒼生 (1987) 『武功夜話』、新人物往来社
- 17) 高橋 学 (2016) 前掲 14)
- 18) 外山秀一 (2008) 『自然と人間との関係史』、古今書院
- 19) 黒田日出男 (1984) 『日本中世開発史の研究』、校倉書房
- 20) 安田喜憲 (1977) 「大阪河内平野における弥生時代の地形変化と人類の居住」、地理科学 27、1-13
安田喜憲 (1984) 「続・「倭国乱」期の自然環境－大阪府河内平野の事例を中心として－」、282-325、小野忠熙博士退官記念事業会編『高地性集落と倭国大乱』、雄山閣
- 21) 高橋 学 (1994) 前掲 1)
- 22) 高橋 学 (1996) 「古代荘園図と自然環境」、115-128、金田章裕ほか編『日本古代荘園図』、東京大学出版会
- 23) 外山秀一 (1992) 「島畑で何が作られたか－花粉分析の成果－」、大阪文化財センター編『図録農耕の技術とまつり』、大阪文化財センター
- 24) 高橋 学 (1996) 前掲 23)
- 25) 太田区立郷土博物館編 (1997) 『トイレの考古学』、東京美術
- 26) 大沢正昭 (1993) 『陳専農書の研究－12世紀東アジア稲作の到達点』、農山漁村文化協会
- 27) 樋口清之 (2014) 『梅干しと日本刀』、祥伝社新書
- 28) 小松茂美 (1994) 『日本の絵巻 7 餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』、中央公論社
- 29) 太田区立郷土博物館編 (1997) 前掲 25)
- 30) 柳田国男 (1979) 『木綿以前の事』、岩波文庫
国産木綿が初めて文献に見えるのは、1510 (永正 7) 年興福寺大乘院に残っている「永生年中記」に「三川木綿」と記されている。
- 31) 金田章裕 (1976) 「条里制施工地における島畑景観の形成」、地理学評論 49-4、249-266
- 32) 高橋 学 (1994) 前掲 1)
- 33) 信秀の没年には、1549 (天文 18) 年説や、1551 (天文 20) 年説や、1552 年 (天文 21) 説などもある。
- 34) 江村専齋 (1710) 『老人雑話』 8
江村専齋は 1565 (永禄 8) 年～1664 (寛文 4) 年に生き加藤清正らに仕えた儒医である。「老人雑話」は友人の伊藤坦庵が専齋の日常談話を記録したものである (1710 (宝永 7) 年刊)。
- 35) 斎藤道三やその父の時代は、大山崎離宮八幡に集う特権商人が扱ったのはエゴマ油。
- 36) 信長が津島商人、熱田商人、生駒屋敷 (小折城) の銭や情報を駆使し、馬回り衆という専従の軍隊を持ち、足軽を主とした長槍や弓、鉄砲を用いた集団戦を組織するという突き抜けた発想を持っていた。
- 37) 赤松啓介 (2004) 『夜這いの民俗学 夜這いの性愛論』、筑摩書房
- 38) 下川耽史 (2011) 『盆踊り 乱交の民俗学』、作品社
- 39) 東郷 隆・上田 信 (2007) 『雑兵足軽たちの戦い』、講談社文庫

(本学文学部教授)

表1 主要年表

年	元号	月	戦乱	場所	味方	敵	出来事
1548年	天文17年						帰蝶と婚約
1549年	天文18年						帰蝶輿入れ?
1550年	天文19年	1月		織田信清犬山の乱	織田信秀	今川義元	
1551年	天文20年						
1552年頃	天文21年	3月			信秀死亡		
1552年	天文21年		山口左馬之助教 継謀反	鳴海城		今川義元	
1552年			坂井大膳造反 信長挙兵	清洲城	織田信光		
1553年	天文22年	4月			斎藤道三		正徳寺の会見
1554年	天文23年	正月	緒川城攻撃	村木城	斎藤道三	今川義元	
		7月	坂井大膳 守護義統殺害	清洲城	斯波義銀	坂井大膳	
1555年	弘治元年	4月	織田彦五郎切腹	清洲城	織田信光	信光那古野で 死亡	太原崇孚雪 斎死亡
1556年	弘治2年	8月	織田信行挙兵	稲生の戦い		柴田勝家 土田御前	吉乃生駒屋敷 4月斎藤道 に/側室 三死亡義龍
1557年	弘治3年	11月	織田信安・信行 と共謀暗殺	清洲城	柴田勝家		長男信忠誕生
1558年	永禄元年	7月	信安・信賢内紛 信安追放	岩倉城攻め浮 野の戦い	織田信清 犬山城		二男信雄誕生
1559年	永禄2年	2月	上洛足利義輝と 謁見				長女五徳誕生
		3月		岩倉城攻め			生駒屋敷踊り
1560年	永禄3年	5月	今川義元殺害	桶狭間戦い		今川義元	
1561年	永禄4年	5月	斎藤義龍病死龍 興				
1562年	永禄5年						
1563年	永禄6年	7月	楽田下見	清洲から小牧 城へ	佐久間信 盛		
1564年	永禄7年	3月	犬山城攻め				
1565年	永禄8年						吉乃小牧城へ
1566年	永禄9年	9月	墨俣一夜城?				吉乃小牧城で 死亡
1567年	永禄10年	9月		稲葉山城落ち る岐阜へ			

The Era of Nobunaga from the Viewpoint of Environmental History II: The Little Ice Age and the Honensai

by
Manabu Takahashi

As the Little Ice Age began, the feudal lord class gathered local clans etc., who served as warriors and farmers, and invaded neighboring territories in search of food, which led to the earnest beginning of the Age of Civil Wars. When they won the fight over territory, people of high rank could gain new land, etc. by cutting up the territory. On the other hand, those of low rank were rewarded in the form of being permitted, within a limited period, to abduct people using violence and freely harvest in people's fields.

In addition, in this period, destitute people wandered towards cities, such as the capital, as well as relatively warmer places, which sometimes caused serious famine.

During the Little Ice Age, vegetation in mountainous regions such as satoyama (undeveloped woodland near populated areas) was destroyed due to the development of demand for fuel for daily use, kannanagashi and tatara iron making, salt making, and ceramic making, and bald mountains and red pine woods of secondary forests spread rapidly. Such destruction of vegetation promoted climate cooling and the formation of large-scale natural embankments, and people started to cultivate shimabata and hotta. Initially, buckwheat was cultivated as an emergency crop in shimabata and hotta, but cash crops such as cotton and rape gradually started to be cultivated too.

Cotton not only feels soft but is easy to dye, and, by being padded, was more convenient than hemp. In addition, rapeseed oil that can be extracted from rape was not bound by medieval constraints as was the guild of Egoma oil produced by Oyamazaki Rikyu-hachimangu. However, cultivation of cotton and rape required irrigation water and fertilizers such as human excreta and urine. It has been confirmed that in the Ichijodani Asakura Family Historic Ruins in the 16th century, each house had its own well and toilet, and it is apparent that human excreta and urine could be used as fertilizer.

When Nobunaga held a meeting with his father-in-law Saito Dozan at Shotokuji, he wore a yukatabira (an ancient Japanese garment worn when having a bath) with a "Daion shape" depicted on the back. He also had a gourd for carrying gunpowder suspended from his waist, ordered foot soldiers to run, and brought with him a large group of professional warriors armed with pikes and bows, which were ideal for fighting in groups, as well as firearms, which had only just been introduced to Japan. It can be assumed that Dozan, having saw this, was astonished by Nobunaga's foresight and became Nobunaga's reliable ally.

Furthermore, Nobunaga did not have any children with his legal wife Kicho (Nohime), and after the death of Dozan, he frequently visited Ikomayashiki and had two sons and a daughter with Kitsuno. He also hosted unceremonious "dances"; these "dances" were likely synonymous with free sex and were also for praying for abundant crops and fertility.

When Nobunaga unified almost all of Owari, he moved his base to Mount Komaki for invading Mino from Kiyosu and built a castle with stone walls as well as a castle town. Furthermore, it can be assumed that he actively carried out Honensai on March 15th (early spring), which were held for abundant crops and fertility

in Oagata Shrine (the “Ososo Matsuri”) and Tagata Shrine (the “Henoko Matsuri”) that were under his control. This can be imagined particularly from the hemp banner (cotton milk) which features a depiction of the “Oowasegata” of Tagata Shrine and a group of people dressed in battle surcoats protecting the front and rear of the banner, the group consisting of six leading the way and six others forming a line.

Around 1552 Nobunaga’s father Nobuhide died, but the former’s succession to the headship of the family did not go smoothly. In particular, a bloody conflict arose between blood relatives such as the Oda-Isenokami family of Kiyosu Castle and the Oda-Yamatonokami family of Iwakura Castle. This conflict was perhaps more difficult for Nobunaga than external conflict.

In this period, Imagawa Yoshimoto lost Taigen Sessai Sofu and spent the five years until the Battle of Okehazama (1560) in idleness. Looked at from a detached perspective, this can be considered as Yoshimoto’s mistake. Or perhaps Imagawa Yoshimoto did not possess the prowess associated with the title of “most powerful warrior lord in Tokaido” and, without Taigen Sessai Sofu, was a man with only mediocre abilities.